慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	会計言語論の意義：会計学の基本問題〔IV〕(9)
Sub Title	Significance of a linguistic approach to accounting
Author	友岡, 賛(Tomooka, Susumu)
Publisher	慶應義塾大学出版会
Publication year	2022
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.64, No.6 (2022. 2) ,p.19- 29
JaLC DOI	
Abstract	繁く「事業の言語」と称される会計について，しかし，そうした会計を説明すべく，言語学を学び，言語学に学び，言語学を援用することに果たして意味はあるのか。会計言語論の意義は奈辺にあるのか。 如上のことについて思量する。
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20220200-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
第64巻第６号
2022 年 2 月

2020年12月28日掲載承認

会計言語論の意義

―― 会計学の基本問題〔Ⅳ〕（９）――

友　岡　　賛

＜要　　約＞

繁く「事業の言語」と称される会計について，しかし，そうした会計を説明すべく，言語学を学び，言語学に学び，言語学を援用することに果たして意味はあるのか。会計言語論の意義は奈辺にあるのか。

如上のことについて思量する。

＜キーワード＞

援用，会計言語論，会計写像論，言語，言語学，事業の言語，実在論，写像，深層構造，正則的な仕訳，相殺，築像，唯言論

あるいは「言語論によれば」といわれ，あるいは「言語論的には」といわれ，あるいは「唯言論によれば」といわれ，あるいは「唯言論的には」といわれ，戸惑いを覚える。勝手にそういわれても……，という感じである。本稿はそうした戸惑いに由来する。

事業の言語

ときに会計は言語に擬えられる。

例えば近年の代表的なテキスト[1]の類いを開いてみれば，伊藤邦雄著においては「第１の会計の本質的な性格は，それが「事業の言語」（language of business）だということである[2]」とまでもい

＜引用について＞

原文における（　）書きや太文字表記や圏点やルビの類いは，原則として，これを省略した。したがって，引用文におけるこの類いのものは，特に断りがない限り，筆者（友岡）による。

また，引用に際して，旧字体は，原則として，これを新字体に改め，促音や拗音の類いが小文字表記されていない場合は小文字表記に改め，漢数字は多くの場合，算用数字に改めるなどの加筆を施している。

1）友岡賛『会計学の考え方』2018年，36～41頁。
2）伊藤邦雄『新・現代会計入門（第４版）』2020年，44頁（（　）書きは原文）。

われ，あるいは広瀬義州著には「ビジネスの言語」という語が繁くみられ[3]，「会計とりわけ財務会計はしばしばビジネスの言語であるといわれる[4]」とされ，「とりわけ財務会計」の理由はさて措き，「ビジネスの言語としての財務会計」という言い様が散見される[5]ものの，ただし，「ビジネスの言語としての財務会計は……外部の利害関係者に対して当該企業の経済活動および経済事象を測定し報告することを目的としている[6]」といった記述において冒頭の「ビジネスの言語としての」にはその存在意義を認めることができず，あるいは「「日本一読まれている財務会計のテキスト」と謳われている[7]」桜井久勝著には「言語」という語はこれをおよそみることができない[8]。

会計言語説の一般性

前項の冒頭には「ときに会計は言語に擬えられる」と些か控え目の言い様をしたが，会計をもって言語とみる行き方は果たして一般性をもっているのだろうか[9]。

1992年刊の或る書は既に「会計を言語とみることは，すでに学界の「通念」になっている[10]」としており，あるいは1995年刊の或る書の所収論攷はこれも既に「会計を一種の言語とみる考えは……今では斯界の定説になっているとさえいえる[11]」としているが，ただし，何をもって「通念」とするかは定かでなく，何をもって「定説」とするかは定かでなく，あえて「既に」としてはみたものの，今日とて「「通念」になっている」のかどうか，今日とて「定説になっている」のかどうか。

また，些か興味深いことには1979年，すなわち40年以上も前に上梓された或る書においては「「会計とは何か」……に対しては〈事業の言語〉だと答える考え方がさかんになってきた[12]」とされ，その四半世紀後，2004年刊の或る書にあっても「近年は以前にもまして，会計の言語性が喧伝される[13]」とされ，しかも，しかしながら，前者においては「事業の言語といっても，単なる譬喩に終わらせてしまってはならない[14]」とされ，後者にあっても「たいていは……表層的……皮相な譬えにとどまっている[15]」とされており，このように皮相な譬喩に終始することをもって案ずる向きは「会計を言語とみる見方は〈会計言語説〉とよばれ……「会計とは何か」を明らかにして

3）広瀬義州『財務会計（第13版）』2015年，1，21，22，67，101頁。
4）同上，22頁。
5）同上，21，67，101頁。
6）同上，67頁。
7）友岡『会計学の考え方』37頁。
8）桜井久勝『財務会計講義（第21版）』2020年。
9）なお，「会計言語肯定論者はすこぶる多い」として筆者をもって「会計言語肯定論者」の一人に挙げた上，筆者の「姿勢」をもって「会計言語説敬遠」と批判する向きがある（友岡賛「コロナ禍と会計――会計学の基本問題〔Ⅳ〕（5）」『三田商学研究』第63巻第3号，2020年，38～40頁）。
10）永野則雄『財務会計の基礎概念――会計における認識と測定』1992年，i 頁。
11）長谷川茂「会計と社会言語的特性」飯野利夫先生喜寿記念論文集刊行会（編）『財務会計の研究――飯野利夫先生喜寿記念論文集』1995年，87頁
12）伊崎義憲『会計学論考』1979年，12頁。
13）全在紋『会計言語論の基礎』2004年，「はしがき」1頁。
14）伊崎『会計学論考』12頁。
15）全『会計言語論の基礎』「はしがき」1頁。

いくうえできわめてすぐれている」[16]といった認識の下，フェルディナン・ド・ソシュール（Ferdinand de Saussure）のそれを首めとする言語学の諸説を援用し，「言語一般の本質をかえりみての」[17]会計言語説をもって展開している。

前項に引かれた伊藤著にいわれるように，「第１の……本質的な性格」はこれが言語性に求められるということが肯定される場合には確かに会計言語説をもって「きわめてすぐれている」と捉えられようが，しかし，果たしてそうか。

伊藤は別に彼自身が言語論を展開しているわけではないし，例えば[18]20世紀中葉，A. C. リトルトン（A. C. Littleton）は「事業を理解させるための事業の言語としての会計（accounting as the language of business to make business understandable）云々」[19]として「事業の言語」と述べながらも，しかし，会計の「他の学問分野との関係」[20]を論ずる際に「言語学」[21]の名も挙げ，「会計が……密接な関係を有していないことは論証をまたずして明らか（clear without a demonstration）である」[22]と門前払いしている。

他方，例えばノーム・チョムスキー（Noam Chomsky）の変形生成文法論に依拠して[23]「複式簿記一般理論」[24]の構築を図る田中茂次は言語学を用いることについて次のように述べている。

> 「一般に何語でもよいが，語学についての教育を受けた人ならば，語学について最低限の基礎知識は有しており，その意味で言語学への関心は万人にとって共通のものであると想定することができる。したがって，言語学への言及をなにか特殊なものと考える必要はない。われわれの見解も，特に言語についての理論を勉強しなければ理解できないというようなものではない」[25]。

しかしながら，「語学」は「学」とは称されるものの，「語学」ではなく，また，「語学」は決して「言語学」ではなく，「語学についての教育」は「○○語についての教育」にほかならず，「○○語についての教育」を受けたからといって，「語学について最低限の基礎知識」があるはずもなく，「言語学への関心」があるはずでもなく，例えば構文論や意味論や語用論の存在を知るはずもない。

16）伊崎『会計学論考』12頁。
17）全『会計言語論の基礎』「はしがき」１頁。
18）以下の記述は下記のものによっている。
　青柳文司『会計学の原理（新版）』1979年，４頁。
19）A. C. リトルトン／大塚俊郎（訳）『会計理論の構造』1955年，144頁。
　A. C. Littleton, *Structure of Accounting Theory*, 1953, p.99.
20）リトルトン／大塚（訳）『会計理論の構造』12頁。
21）同上，13頁。
22）同上，13頁。
　Littleton, *Structure of Accounting Theory*, p.8.
23）田中茂次『会計言語の構造』1995年，14～18頁。
24）同上，「序文」２頁。
25）同上，「序文」２頁。

しかも，この向きいわく，「ことさらに言語学を持ち出さなくても，複式簿記の基本構造についての見方は，結局のところ，このような形に帰着せざるを得なかったであろう[26]」。

これはどういうことだろうか[27]。

ちなみにまた，「会計情報と会計言語[28]」という二つの概念を俎上に載せる或る会計言語論者いわく，「会計言語といいあるいは会計情報といっても結局は，財務諸表などの会計報告をさしている。だから，どちらを使ってもよいのである[29][30]」。

会計言語論者の目的

会計言語論者は何をしたいのだろうか。

けだし，まずは，言語論の援用をもって会計をよりよく説明したい，といったことだろうが，果たして本当にそうか。

確かにわが国の会計言語論の第一人者たる青柳文司[31]は「言語と情報という相互に入り組んだ概念を検討してきた……結果……言語を手がかりに会計の本質を考えることが良策であり云々[32]」といった言い様をしているが，他方，例えば或る会計言語論者は哲学者にして言語論を展開したミシェル・フーコー（Michel Foucault）を取り上げ，「フーコー権力史観を支える知の枠組みにおける変遷は，会計学説の歴史的変転においても十分に〈検証〉されうる[33]」と結論しており，これは会計のための援用ではないだろう。

会計言語論者はやはり言語論をしたいのだろうか。例えば「認識 = 存在論に対する3種の見方（実在論・観念論・唯言論）から筆を起こし[34]」「本稿が援用するソシュールやフーコーらの構造主義言語学は，唯言論を知の準拠枠としている[35]」として「友岡の実在論的言語観[36]」をもって批判する向きはやはり言語論をしているのではないか。この向きは「言葉が存在を規定している（唯言論）のであり，存在が言葉を規定している（実在論）のではない[37]」として「実在論や観念論

26）同上，「序文」2頁。

27）ただし，或る書評いわく，「「ことさらに言語学を持ち出さなくても……」という田中教授の述懐は，評者にもよく理解できる」（笠井昭次「田中茂次著『会計言語の構造』（書評）」『會計』第149巻第4号，1996年，119頁）。

28）伊崎『会計学論考』92頁。

29）同上，92～93頁。

30）あるいは「会計言語といい，あるいは会計情報といったところで，要するに財務諸表ないし会計報告，あるいはその基礎資料である証ひょうや伝票または帳簿のことであるから，あまりことばにこだわる必要はない」（伊崎義憲『監査行動の研究』1980年，20頁）。

31）「斯学において，会計を言語と見ての体系的な研究は青柳文司を嚆矢とする」（全『会計言語論の基礎』47頁）とされ，あるいは「「会計言語説」（The Linguistic Theory of Accounting）は，青柳文司により提唱された」（全在紋「複式簿記の誕生（新説）」『桃山学院大学経済経営論集』第61巻第4号，2020年，241頁（（　）書きは原文））ともされる。

32）青柳『会計学の原理（新版）』11頁。

33）全在紋『会計の力』2015年，iii頁。

34）全「複式簿記の誕生（新説）」232頁（（　）書きは原文）。

35）同上，229頁。

36）同上，240頁。

37）同上，253頁（（　）書きは原文）。

の欠を知り，唯言論の完を探る一つの手立て」[38]として「収益費用観か資産負債観か」[39]を引き合いに出し，「実在論の破綻は，今や会計的にも明らかであろう」[40]と結論しているが，この「会計的にも」はやはり，会計学の論ではなく，言語学の論であることを意味しているのではないだろうか。

他方，言語学の論ではなく，言語学をもって会計学の論に援用する場合にはその援用が会計を説明することにおいて，すなわち説明力において優位性を有していなければならないといえようが，ただし，会計言語説における会計学と言語学の関係については次のようにも説明される。

> 「会計言語説の立場からすると，会計学の研究対象は会計表現と会計行為であった。会計表現は言語に，会計行為は言語行為に擬えて説明される。だが，会計表現と会計行為が言語および言語行為に吸収されてしまったのでは，会計学の存在理由がなくなってしまう。会計学は言語学でもなければ言語行為論でもない。会計表現や会計行為を認識する際の準拠枠として言語学や言語行為論を利用する」[41]。

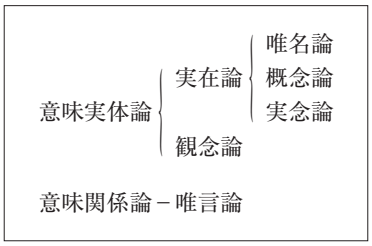
この説明による限りは，言語学ではなく，会計学の論が意図されているといえようが，ただし，「会計言語説の立場からすると」とされているのみであって，「会計言語説の立場からすること」の優位性は明らかでなく，また，「会計学の存在理由がなくなってしまう」ことは，けだし，会計学者以外の者にとっては，およそ問題ではない。

あるいは例えば「会計の言語性と国際的調和」[42]を論ずる或る向きは「政治的議論になりがちの「会計の国際的調和」の問題に，会計学の側から多少なりとも理論的な道筋を見い出すとするならば，……会計のもつ言語性に着目して言語学的視点から検討を加えるよりほかないのではないかと思う」[43]としつつも，「ほかない」とまでいいうる論拠は定かでなく，しかも，「会計を一種の言語とみた場合，統一化という形での調和はありえないと思う。……言語は各民族や各国のアイデンティティーの基盤で，皆自己の言語を守るために必死の努力をしてきたという歴史的事実からである。この点会計も同じはずで，自己の言語を放棄し統一化を受け入れるなどということはありえないからである」[44]とされるものの，「会計を一種の言語とみた場合」「会計も同じはず」という説明の有意性はこれも定かでない。

いや，しかしながら，「説明力において優位性を有していなければならない」とは前述したものの，説明力に優位性がなくとも，言語学的にいえばこうなる，といった説明が面白ければ，それはそれでよい。面白さは有意性をもって構成する。

38）同上，251頁。
39）同上，251頁。
40）同上，255頁。
41）伊崎義憲『会計と意味』1988年，13頁。
42）長谷川茂『会計の社会言語論的展開』2008年，281頁。
43）同上，288頁。
44）同上，288頁。

図１　存在論の類型



意味実体論批判，実在論批判

言語の意味と表裏をなす[45]存在論は**図１**[46]のように分類されるという。

言語学にあっては意味実体論が支配的，実在論が支配的とされる。すなわち「実体が先在し，言葉はそれら実体を後から写像しているだけなのか。あるいは，言葉が先に創作され，実体はそれら言葉により後から築像されるのか。前者が意味実体論の言語観であり，後者が意味関係論の言語観である[47]」とされ，「コトバの意味（実体）をオリジナル，コトバをそのコピーとするならば，実在論も観念論も，内容的には共に「反映論」（写像論）と見られよう[48]」とされ，「今も実在論を正当とみる者が圧倒的多数である。実在論が世上の常識である[49]」とされ，さらに会計言語論においても同様とされる。すなわち「会計言語論においても，意味実体論が常識すなわち多数説で，意味関係論は少数説にすぎない[50]」とされ，「意識して意味関係論に立脚するものは青柳，永野（永野則雄）ら，いまだ極めて少数である[51]」とされる。

如上の状況は「会計人は長い間，「会計は組織の経済的現実を反映（写像）すべきである」という通念に支配されてきた[52]」ともいわれるが，そうした「会計写像論の限界[53]」が指摘され，少数派は会計写像論をもって否定する。意味実体論はすなわち会計写像論とされ，すなわち「言語としての会計における意味実体論とは，原価主義あるいは時価主義など一定の規則によって，会計の対象をなす経済諸事象を会計の財務諸表等における諸記号への対応的写像と観じる見方である[54]」とされ，「それゆえ，言語としての会計における意味実体論は，「会計写像論」とも称されうる[55]」とされる。例えば永野によれば，「会計内外の事実から会計事実が構築されるということは，言語表現の観点からいえば，企業の経済事象にかかわる日常言語や法律・経済などの専門言

45）全『会計の力』17頁。
46）同上，18頁。
47）同上，91～92頁。
48）全『会計の力』６頁（（　）書きは原文）。
49）同上，６頁。
50）全『会計言語論の基礎』47頁
51）同上，48頁。
52）國部克彦「写像と築像の会計理論」『JICPA ジャーナル』第４巻第３号，1992年，42頁（（　）書きは原文）。
53）同上，42頁。
54）全『会計言語論の基礎』147頁。
55）同上，147頁。

語による各種の表現から会計表現が作成されることである。これを簡単に，他の言語から会計言語への〈翻訳〉であるといえるであろう[56]」とされ，「会計言語が他の言語からの翻訳であれば，それを「写像」ということもできよう[57]」とはされるものの，しかし，「会計における表現は対象の写像ではなく，対象についての像を構築するという意味で〈築像〉とでもいうべきものである[58]」と結論される。あるいは或る唯言論者によれば，「会計表現を「写体」とか「写像」というのは，会計実在論の見方に他ならない[59]」とされ，「我われの会計唯言論によれば，会計用語に対して，バイアスレスな表現である「写体」や「写像」よりもむしろ，バイアスフルな表現である「偏像」の方が，いっそうリアリスティックだと考える[60]」ともされる。

さらにまた，少数派は会計学において「意味実体論的言語観に立脚する理論の典型例[61]」とされる「井尻雄士の会計言語論[62]」をもって俎上に載せ，「井尻理論では，会計現象としての架空資産の生起を論理的に説明できない[63]」とし，「井尻理論では，会計現象としての簿外資産の生起も論理的に説明できない[64]」としているが，この向きが繁く引く[65]井尻の『会計測定の基礎』には，財政状態および経営成績と財務諸表の関係を本体と写体の関係と捉える記述はあるものの[66]，そこに［会計 ⊂ 言語］と捉える記述はなく[67]，「言語は非常に進んだ表現方法であるが，会計において使われる表現方法はもっと複雑で組織的なものである[68]」といった言語と会計を別物とするような記述もある。しかし，８年後に刊行された『会計測定の理論[69]』には「企業活動の言語たる会計[70]」という記述もあれば，「会計言語[71]」という語もあり，けだし，この８年間に［会計 ⊂ 言語］という認識が生じたのか，あるいは『会計測定の基礎』においては無自覚であったそうした認識が『会計測定の理論』にあっては自覚されるに至ったのか。

井尻理論を批判する少数派は無自覚の［会計 ⊂ 言語］説について次のように述べている。

> 「「会計の言語性」を自覚しない場合であれ，暗黙のうちにも会計人は何らかの言語観に立脚して議論することになる。会計が言語である限り，これはどの会計人も避けることがで

56）永野『財務会計の基礎概念』40頁。
57）同上，40頁。
58）同上，40～41頁。
59）全「複式簿記の誕生（新説）」265頁。
60）同上，266頁。
61）全『会計言語論の基礎』146頁。
62）同上，146頁。
63）同上，175頁。
64）同上，175頁。
65）同上，第５章。
66）井尻雄士『会計測定の基礎――数学的・経済学的・行動学的探究』1968年，３頁。
67）同上，第１章。
68）同上，25頁。
69）『会計測定の基礎』の原書 *The Foundations of Accounting Measurement: A Mathematical, Economic, and Behavioral Inquiry* は1967年刊，『会計測定の理論』の原書 *Theory of Accounting Measurement* は1975年刊。
70）井尻雄士『会計測定の理論』1976年，20頁。
71）同上，20頁。

きない。ありていに言えば，無自覚のうちに意味実体論的言語観に立脚して議論している者がほとんどである[72]」。

「会計が言語である限り」とはどういうことか。［会計 ⊂ 言語］は動かしがたいことなのだろうか。

援用の意義，言語論の必要性

先述のように，会計言語論は，これが言語学の論ではなく，言語学をもって会計学の論に援用する場合にはその援用が会計を説明することにおいて，すなわち説明力において優位性を有していなければならないといえようが，そうした会計言語論者のなかにあって会計の深層構造ないし会計の構造の深層論理をもって俎上に載せる向き，すなわち前出の田中および彼による「「会計深層構造論」の思考を理論展開の基礎[73]」とする上野清貴が目に留まる。

この向きにおいては前出のチョムスキーの変形生成文法論が用いられる。「会計は言語に基本的な支点をおいているという観点から，チョムスキーの言語理論を会計理論に適用したのが，田中茂次の「会計深層構造論」である[74]」とされ，「支点」とは何か，あるいは「基本的な支点をおいている」とはどういう意味か，といったことはさて措くが，チョムスキーによれば，「統語部門の文法構造に深層構造と表層構造とがあり，表層構造は深層構造から種々の変形規則を適用することによって生成する[75]」とされ，田中によれば，「深層構造から表層構造が生成される場合，両構造を媒介するものとして変形規則が適用されるのであるが，この変形規則の性格は基本的には相殺規則である[76]」とされる。

すなわち，具体的には例えば

［（借方）棚卸資産 XXX ／（貸方）買掛金 XXX］

という通常の仕訳は

［（借方）棚卸資産 XXX ／（貸方）棚卸資産増加益 XXX］

という便益関連取引（収益関連取引）の仕訳と

［（借方）買掛金増加損 XXX ／（貸方）買掛金 XXX］

という犠牲関連取引（費用関連取引）の仕訳に分解され[77]，「この分解仕訳は，通常の会計仕訳に現れてくるものではなく，会計構造の深層に潜在するものであるということができ……それゆえ，分解仕訳に基づく会計構造は「深層構造」と呼ばれ……通常の会計仕訳に基づく会計構造は「表

72）全『会計言語論の基礎』146頁。
73）上野清貴『会計構造の深層論理――真の複式簿記システムの探究』2020年，iii 頁。
74）同上，6 頁。
75）同上，2 頁。
76）田中茂次『会計深層構造論』1999年，ii 頁。
77）田中『会計言語の構造』50～52頁。
田中『会計深層構造論』15～19頁。
上野『会計構造の深層論理』8 ～10頁。

層構造」と呼ばれ……深層構造は表層構造の基礎にあるものであり，表層構造は深層構造に相殺規則などの変形規則を適用して成立したものである[78]」とされ，すなわち，この立場は「損益の増減をもたらさない取引[79]」とされる交換取引をもって否定する[80]。

また，如上の深層構造については「観察可能な会計仕訳の基底に存在しながら，表面に常に現れるとは限らない潜在的な構造[81]」とされ，これは「観察はできないが理論的に推論しうるような諸特徴によって再構成されうるような概念的な構造[82]」であるとされ，上野によれば，「会計を理論的に説明できない……その根本的な問題点は，会計理論構築を会計の表層構造から出発していることに起因している[83]」とされ，「会計の基本取引は損益取引であり，会計理論構築の出発点はそれに基づく深層構造でなければならない[84]」とされている。

かくして如上の上野の論は「会計の深層構造を明らかにし，会計理論構築の出発点を深層構造におくべきことを主張することを目的として，まず，会計は言語に基本的な支点をおいているということから，チョムスキーの所論に従って云々[85]」とまとめられているが，しかし，果たしてここに言語論は必要なのだろうか。

「支点」とは何か，あるいは「基本的な支点をおいている」とはどういう意味か，ということはやはりこれが気に懸かる。「会計理論構築の出発点を深層構造におくべきこと」の主張が「目的」とされ，そのためにチョムスキーが持ち出される，とはどういうことか。会計をよりよく説明すべく，言語学を学び，言語学に学び，その結果，「会計理論構築の出発点を深層構造におくべきこと」が知られる，ということではないのか。しかし，「深層構造」や「表層構造」といった名称はさて措き，そうした考え方は言語学に学ばなければならないのだろうか。果たしてここに言語論は必要なのだろうか。

例えば「正則的な仕訳[86]」という概念を用いる向きがある。

この向きにおいては「正則」それ自体の直接的な定義は示されないものの，「企業の経済活動を表現する技法としての「正則的な仕訳[87]」」といった言い様がなされ，また，その vs. は「財務諸表を作成するための手段[88]」としての仕訳とされ，あるいは「実践における簡便的な仕訳[89]」とされ，あるいは「一般的な仕訳[90]」とされ，正則的な仕訳との異同は相殺にあるとされる[91]。例えば

78）同上，10頁。
79）同上，１頁。
80）同上，２頁。
81）田中『会計深層構造論』19頁。
82）同上，19頁。
83）上野『会計構造の深層論理』27頁。
84）同上，28頁。
85）同上，28頁。
86）平野智久『仕訳でかんがえる会計学入門』2019年，13頁。
87）同上，13頁。
88）同上，ⅱ頁。
89）同上，13頁。

［（借方）仕掛品 XXX ／（貸方）材料 XXX］

という「一般的な仕訳」は，しかし，宛も材料と仕掛品の交換であるかのようにみえ，「「加工」という経済活動を忠実に表現しようとするならば[92]」とされ，これにおける「正則的な仕訳」は

［（借方）材料費 XXX ／（貸方）材料 XXX］

および

［（借方）仕掛品 XXX ／（貸方）材料費 XXX］

とされる[93]。

「正則的な仕訳」の目的とも解される「忠実に表現云々」については財務会計基準審議会（Financial Accounting Standards Board）（FASB）のいう「表現の忠実性[94]」が想起され，同審議会によれば，「表現の忠実性とは，ある測定値または記述と，それらが表現しようとする現象とが対応または一致することをいう[95]」とされ，「会計情報の質的特徴を論ずるにあたって，何よりもまず「表現の忠実性」を強調している[96]」とされる同審議会の立場は，前出の少数派によれば，「言語と対象との間における「一致」の重視は……「会計写像論」をなす[97]」として批判されようが，それはさて措き，如上の正則的な仕訳については「一見するとややこしく感じるかもしれませんが，実は応用力に長けた「すぐれもの」です[98]」とされており，けだし，応用力はこれが普遍性によってもたらされ，普遍性は相殺の類いのないところにこそ存する，といえようか。

一般に行われる仕訳は相殺を経てもたらされる，という問題意識は深層構造論と同様[99]ともされる「正則的な仕訳」概念は，けだし，言語学に学ぶことなく，もたらされよう。

文　献

青柳文司『会計学の原理（新版）』中央経済社，1979年。
全在紋『会計言語論の基礎』中央経済社，2004年。
全在紋『会計の力』中央経済社，2015年。
全在紋「複式簿記の誕生（新説）」『桃山学院大学経済経営論集』第61巻第４号，2020年。
長谷川茂「会計と社会言語的特性」飯野利夫先生喜寿記念論文集刊行会（編）『財務会計の研究――飯野利夫先生喜寿記念論文集』税務経理協会，1995年。
長谷川茂『会計の社会言語論的展開』森山書店，2008年。
平松一夫，広瀬義州（訳）『FASB 財務会計の諸概念（増補版）』中央経済社，2002年。
平野智久『仕訳でかんがえる会計学入門』新世社，2019年。
広瀬義州『財務会計（第13版）』中央経済社，2015年。

90）同上，24頁。
91）この向き本人談。
92）平野『仕訳でかんがえる会計学入門』23頁。
93）同上，23～24頁。
94）平松一夫，広瀬義州（訳）『FASB 財務会計の諸概念（増補版）』2002年，92頁。
95）同上，92頁。
96）全『会計言語論の基礎』129頁。
97）同上，129頁。
98）平野『仕訳でかんがえる会計学入門』ii 頁。
99）この向き本人談。

井尻雄士『会計測定の基礎――数学的・経済学的・行動学的探究』東洋経済新報社，1968年。
井尻雄士『会計測定の理論』東洋経済新報社，1976年。
伊崎義憲『会計学論考』創成社，1979年。
伊崎義憲『監査行動の研究』創成社，1980年。
伊崎義憲『会計と意味』同文舘出版，1988年。
伊藤邦雄『新・現代会計入門（第４版）』日本経済新聞出版社，2020年。
笠井昭次「田中茂次著『会計言語の構造』（書評）」『會計』第149巻第４号，1996年。
國部克彦「写像と築像の会計理論」『JICPA ジャーナル』第４巻第３号，1992年。
A. C. Littleton, *Structure of Accounting Theory*, American Accounting Association, 1953.
A. C. リトルトン（A. C. Littleton）／大塚俊郎（訳）『会計理論の構造』東洋経済新報社，1955年。
永野則雄『財務会計の基礎概念――会計における認識と測定』白桃書房，1992年。
桜井久勝『財務会計講義（第21版）』中央経済社，2020年。
田中茂次『会計言語の構造』森山書店，1995年。
田中茂次『会計深層構造論』中央大学出版部，1999年。
友岡賛『会計学原理』税務経理協会，2012年。
友岡賛『会計学の基本問題』慶應義塾大学出版会，2016年。
友岡賛『会計と会計学のレーゾン・デートル』慶應義塾大学出版会，2018年。
友岡賛『会計の歴史（改訂版）』税務経理協会，2018年。
友岡賛『日本会計史』慶應義塾大学出版会，2018年。
友岡賛『会計学の考え方』泉文堂，2018年。
友岡賛「会計と会計学のレーゾン・デートル」『企業会計』第71巻第１号，2019年。
友岡賛『会計学の地平』泉文堂，2019年。
友岡賛「会計ファームはプロフェッショナルに徹するべき」『Best Professional Firm 2020』プレジデント社，2020年。
友岡賛「コロナ禍と会計――会計学の基本問題〔Ⅳ〕（５）」『三田商学研究』第63巻第３号，2020年。
友岡賛「「複式簿記」を説明することの意味――会計学の基本問題〔Ⅳ〕（１）」『三田商学研究』第63巻第５号，2020年。
友岡賛「資本維持の論拠――会計学の基本問題〔Ⅳ〕（２）」『三田商学研究』第63巻第６号，2021年。
友岡賛「引当金と繰延資産――会計学の基本問題〔Ⅳ〕（３）」『三田商学研究』第64巻第１号，2021年。
友岡賛「会計主体論の存在意義・再論――会計学の基本問題〔Ⅳ〕（４）」『三田商学研究』第64巻第２号，2021年。
友岡賛「会計情報の「比較可能性」の意義――会計学の基本問題〔Ⅳ〕（６）」『三田商学研究』第64巻第３号，2021年。
友岡賛「会計のフロンティアの果て――会計学の基本問題〔Ⅳ〕（７）」『三田商学研究』第64巻第４号，2021年。
友岡賛「学説・理論の現代的意義の意義――会計学の基本問題〔Ⅳ〕（８）」『三田商学研究』第64巻第５号，2021年。
上野清貴『会計構造の深層論理――真の複式簿記システムの探究』中央経済社，2020年。

2020年12月28日成稿